

石川啄木の自然主義的試みと反発

―啄木小説作品群についての考察―

文化創造研究科クリエイティブライティング領域

一七〇〇―CCM張 済人

修士論文要旨

本論は、石川啄木の小説作品群を研究対象とし、啄木の自然主義的な試み及び反発を明らかにしようとするものである。「啄木的な自然主義」の形成過程を辿りながら、「反自然主義」と目されてきた啄木小説を、むしろ逆に自然主義文学運動の文脈の中に位置付けてみたい。またこれを通じて、自然主義文学研究を更新することができれば望ましい。

序論では、啄木研究、特に啄木小説研究の現状を概観する。従来の研究では、啄木小説に対する重視が不足である一方、僅かながら啄木小説に対する関心を持っている研究も、まだその意義を位置づけ切れていないことを確認する。その上で、本論が「啄木的な自然主義」という新しい視角を用いながら啄木小説を論じ直すことの意味を提示する。

第一章では、啄木が明治三十九年に執筆した「雲は天才である」、

「葬列」と、明治四十年に執筆した「漂泊」を考察する。これらの作品は、反道徳的な傾向が強く、痛烈な社会批判をした。しかし、いずれも批判に留まり、具体的な解決を提示しなかった。作品によって表された社会的な理想は結局、それ自体の意味が曖昧である一方、実行にならない「空想」となってしまった。上京前の啄木の小説創作への熱意と初期の理想主義的な風格を分析することによって、啄木的な自然主義を形成する基盤を明らかにする。

第二章では、啄木が明治四十一年に執筆した「病院の窓」を考察する。「病院の窓」には、自然主義文学を模倣する痕跡が明らかに見える。この作品は、自然主義文学の常套的な主題を扱い、登場人物の苦悶と絶望を描いた。しかし、語り手の設置は独特で、二重の視角によって主人公を観察することも、当時の自然主義文学の尖端部と符合するのである。ただし、共感を喚起しない欠如があるために、「病院の窓」はあまり評価が得られなかった。本章は「病院の窓」が評価されなかった原因を説明する一方、従来指摘されてこなかった「病院の窓」の価値を示したい。

第三章では、明治四十二年『スバル』創刊号に発表された「赤痢」を考察する。「赤痢」は、「病院の窓」に比べると、より「自然主義らしい」作品となった。この作品の方法は、田山花袋の『美文作法』で述べた方法に類似的である一方、岩野泡鳴が提唱していた一元描写にも合致するところがある。そして、登場人物の心理だけでなく、様々な社会問題も、「赤痢」の中で詳しく表現した。「啄木的な自然主

義」の特徴としての社会的関心と個人的理想との齟齬は、この作品から見出される。この特徴は、後に主流となった私小説的な自然主義文学を超越したところとされている。

第四章では、明治四十三年に執筆した「我等の一団と彼」を考察する。「我等の一団と彼」は啄木の最後の小説創作であり、「啄木的な自然主義」の結果として評価し得る作品である。本作は自然主義的な手法を用いた一方、さらに自然主義を批評の対象として直接に登場人物の対談に盛り込んだ。そこで、啄木が理解する「自然主義者」と知識人の青年との齟齬や対話を描いた。自然主義の破綻と時代と個人の問題について多くを説いた「我等の一団と彼」は、同年の後に執筆された有名な評論「時代閉塞の現状」の前奏曲といえるのではないか。本章では、この作品の思想性を中心として分析を行う。

「終わりに」の部分では、前述の問題をまとめ、結論としての総説をする。啄木小説から視えるのは、「自然主義への接近」から「自主義批判」へという簡単な経緯のみではなく、個人問題上のリアリズムより社会問題上のリアリズムを注視する「啄木的な自然主義」という新たな形式ができたことも無視できない。啄木文学の「未完成」という形がいかなる意味を有するのかを思考すると、文学そのものの本質がむしろこのような「未完成」ではないかとも考えられる。さらに、今後の研究方向を展望し、自然主義文学研究をどう更新するかという問題について述べた。